書　評

レイウィン・コンネル著／多賀太監訳『ジェンダー学の最前線』

世界思想社、2008年

山　口　季　音

本書の構成：

第１章　ジェンダーとは何か
第２章　学校・鉱山・性・戦争
第３章　差異と身体
第４章　ジェンダー関係
第５章　個人生活におけるジェンダー
第６章　マクロレベルにおけるジェンダー
第７章　ジェンダーと知識人
第８章　ジェンダー・ポリティクス

本書は、オーストラリアの代表的な社会学者であり、世界的に有名なジェンダー研究者であるR. コンネルの著作、*Gender*, Cambridge: Polity Press, (2002) の全訳である。コンネルのジェンダーや男性性に関する理論は、英語圏を中心にジェンダー学での重要な位置を占めており、日本のジェンダー学でも注目されている。しかし日本において、これまでその著作は *Gender and Power* (1987) (森重雄ほか訳『ジェンダーと権力』、三交社、1993) が日本語に訳されているのみであった。本書は、15年ぶりのコンネル著作の邦訳書である。

本書は、監訳者が出版にあたって邦訳タイトルを『ジェンダー学の最前線』としたように、現代のジェンダー学がどのような地点まで進んでおり、どのような問題を抱えているのかを解説してくれるテキストである。その内容は、入門者にジェンダー学の基本的な知識とともに、ジェンダーに関する研究の歴史を解説してくれるものとなっている。現在の問題を理解するためには、過去にどのような問題があったのかを理解する必要がある。本書を読み進めることで、ジェンダー問題についての理解を深めることができるだろう。

しかし、本書は単なる入門者向けのテキストというわけではない。本書は入門者だけでなく、ジェンダー研究者にとっても示唆に富む内容となっている。

本書では、コンネルが『ジェンダーと権力』で行ったジェンダー分析に、新たな視点からのアプローチが加えられている。それらのアプローチとは、1.ジェンダーや身体などに関するポスト構造主義、ポストモダニズムの見解、2.心理学におけるメタ分析、3.男性と男性性に関する研究、4.組織におけるジェンダー研究、5.帝国主義、新植民地主義、現代のグローバリゼーションにおけるジェンダー研究、という５つの視点からのものである。

以下では、各章の内容を簡単に紹介する。

第１章では、ジェンダーに関する基本的な考え方について、人々の日常の出来事や男女の不平等の現状を通して、丁寧な解説を行っている。また、第１章の第３節では、ジェンダー概念に関する解説を行った後、ジェンダーの一般的な定義、すなわちジェンダーを生物学的な性差とは区別される社会的に作られた性差とする定義とは異なる、独自のジェンダーの定義を行っている。

第2章では、ジェンダーについての議論や調査研究の参考となるよう、近年発表された四件のジェンダー分析を検討している。それらは、学校で行われたエスノグラフィー、鉱山で働いていた鉱夫やその関係者へのインタビュー調査、同性愛者へのインタビュー調査、そして国家レベルにおけるジェンダーの変容を論じた歴史研究である。本章では、ジェンダーを語るということが、単に男女という差異やカテゴリーに言及することではないということが強調されている。

第3章では、男女の身体的な差異の議論を検討している。コンネルは、男女の身体的な差異に基づく男女の違いという発想の問題を検討し、そのような発想が男女の性格の二分法と関連づけられていると指摘する。そして心理学の知見は、男女の心理的な差異はほとんどないことを示しており、このことは「メタ分析」でより明らかにされているという。最後に、身体的な差異の議論に関して新たな提案を行い、コンネル独自のジェンダーの定義で用いられている諸概念を詳細に説明している。

第4章では、コンネルが『ジェンダーと権力』で提起したジェンダーの構造のモデルを、さらに発展させて提示している。そのモデルは、権力関係、生産関係、感情関係、新たに加えられた象徴関係の4つで構成されている。4章の後半では、ジェンダーが普遍的なものではなく歴史的なものであることを解説し、提起した4つのジェンダーの構造がいかに変化しているのかを、ミクロな視点とマクロな視点から述べている。

第5章では、個人の成長や生活の仕方、アイデンティティやセクシュアリティなどとジェンダーとの関係を検討している。本章ではまず、「性役割」研究の問題を指摘する。さらに、ジェンダー・アイデンティティに関するとらえ方や、セクシュアリティの歴史的な変化を解説している。ここで議論の中心となっているのは、ジェンダーだけでなく、アイデンティティやセクシュアリティの多様さや複雑さである。

第6章では、第4章で提起したジェンダーの4つの構造のモデルを、企業、国家、そして世界社会というマクロなジェンダー関係に適用している。ジェンダーの議論の多くは、アイデンティティや子育てといった「局所的」(local)な事象に関わるものであるが、そうした事象における問題を解決するためには、マクロなジェンダー関係を考慮に入れなければならないと主張している。

第7章では、ジェンダーに関する考え方の歴史を理解するため、様々な時代の中でジェンダーがどのような問題と考えられ、それに対してどのような理論が生まれたのかを、時代を4つに区分して検討している。この章では、「ジェンダーの理論」が生まれる時代的な背景や、思想が対立する状況、フェミニズムが分化してきた歴史を検討することで、現在のジェンダーを理解するために必要な問題が解説されている。

第8章では、世界的なジェンダー・ポリティクスを検討している。まず、コンネル自身の個人的経験にも言及しながら、個人の生活に関連するミクロなポリティクスと、制度や運動と関連するマクロなポリティクスとの関係を論じている。次に、現在のジェンダー秩序を変えるべきだと主張するためには、現在のジェンダー秩序のもとで集団としての男性が得る利益を視野に入れながら、そこには利益よりも危害があることを示すべきだという。最後に、世界規模におけるジェンダー・ポリティクスを概説している。

本書の構成や各章の内容を見ればわかる通り、本書が扱っている内容は、個人のアイデンティティやパーソナリティなどのミクロなレベルから、国家やグローバル社会などのマクロなレベルまで非常に広く、多岐に渡っている。本

書の特長は、そうしたジェンダー学の広範囲に渡る知見を、雑多な感じをさせることなく、見事にまとめ上げているところである。本書のジェンダーに関する解説は、ジェンダー学の入門者が「ジェンダー学は何を問題としているのか」を理解するのに大いに役立つだろう。また、本書のジェンダーに関する最新の研究事例の概説は、ジェンダー問題を理解する上で非常に有効だと思われる。

さらに本書は、ジェンダー学に関する基本的な解説だけではなく、ジェンダー学の今後にとって重要な提起も行っている。本書が、日本のジェンダー学の発展に寄与する点として、以下の3点をあげることができるだろう。

第1に、コンネル独自のジェンダーの定義や、それに関連した身体的な差異に関する議論である。コンネルは、独自のジェンダーの定義と関連して、身体的な差異に関する議論に新たな提案をしている。ジェンダー概念の定義は、生物学的性差（セックス）と区別される社会的性差（ジェンダー）から始まり、その後、性別についての知識として再定義された。しかし、知識としてのジェンダーの定義は、身体についてどう考えるのか曖昧な部分があるように思われる。コンネルは、ジェンダーを特殊な社会構造だと指摘し、その理由は「ジェンダーは、身体と特別な関係を有している」(21頁）ことであるとして、ジェンダーと身体との関係に目を向けている。

身体的な差異の議論には、差異を自然なものとする考え方、生物学的な性差（セックス）と社会的な性差（ジェンダー）の二つの領域があるとする考え方、そして、ジェンダーを言説とみなし、身体よりも先行するというポスト構造主義的な考え方がある。コンネルは、これら三つの考え方にはそれぞれ問題があるという。現在のジェンダー学において中心と思われるポスト構造主義的なアプローチにも、一定の意義はあるものの、言説が身体に与える影響を強調し過ぎている点を指摘している。そのために、身体には能動的な側面があるにもかかわらず、あまりにも身体を受動的に考えている点が問題であるという。コンネルは、身体は社会的実践の対象であると同時に、社会的実践における主体であるという。そして、社会が様々な手段で身体へ働きかけを行う「舞台」が存在するといい、それを「性と生殖の舞台」(reproductive arena)と呼ぶ。

こうした身体的な差異に関する議論を通して、コンネルはジェンダーを、「性と生殖の舞台をめぐって構築される社会関係の構造であり、諸身体間の生殖上の区別を社会過程に関連づける(この構造に制御された)一連の実践」(22頁）と定義する。

コンネルのジェンダーの定義は、一般的な定義と比較すると難解に思えるかもしれないが、ジェンダー問題を考える上で重要な提示である。身体的な差異を自然なものとするアプローチも、生物学的な性差（セックス）と社会的な性差（ジェンダー）というアプローチも、多様な現実をとらえるには問題がある。知識としてのジェンダー概念も、意図していなくとも身体の問題を曖昧にしてしまうことがある。ジェンダー学に対する批判として、ジェンダー学が「性差は存在しない」と主張しているという誤った解釈が存在するが、身体の問題が曖昧であることが、そうした誤解を生んでしまう要因ではないだろうか。コンネルのジェンダーや身体的な差異に関する議論は、こうしたジェンダー学の課題を進展させるものととらえることができる。

第2に、ジェンダーの多様性や矛盾を理解する視点の提供である。コンネルは、男女の差異と二分法を通した一般的なジェンダーの定義では、単純ではないはずの人の日常行動や性格を二つに区分してしまうことや、同性同士の差異

(異性愛と同性愛など) を概念から除外してしまうことを指摘している。こうした点を読み進めていくことで、ジェンダーという現象がいかに多様なものであり、男女という差異と二分法では語りきれないものであることを理解できるだろう。現代のジェンダー学を学ぶ上で、ジェンダーの多様性を認識することは、大変重要なものと言える。ジェンダーの多様性への認識は、本書の各章でたびたび強調されていることである。この点を理解することは、現代のジェンダー学を学ぼうとする入門者にとって、第一歩と言えるのではないだろうか。

また、ジェンダーに関する現象は、多くの矛盾も感じさせる。例えば、現在のジェンダー秩序のもとで不平等を受けている女性が、ジェンダーが変化することに恐れを感じることである。これはコンネルが言うように、個人の自己イメージやアイデンティティとジェンダーが密接に関わっているからであり、ジェンダーの変化はそうした個人的な事柄を大きく混乱させるからである。また、現在のジェンダー秩序のもとで、集団としての男性は大きく利益を得ているが、まったく利益を得られない男性も少なくない。しかし、利益を得られない男性であっても、ジェンダーの変化を拒否することがある。ジェンダーには、多様性とともにこうした矛盾が存在する。

コンネルは、1970年代、性役割を変化させるために女性解放は男性にとっても有益であると説いた改革者たちは、ジェンダー秩序のもとで男性が得る利益を低く見過ぎたという。つまり、現状のジェンダーを変化させるべきだと主張するためには、集団としての男性の利益に注目しつつ、現在のジェンダーによる危害が利益よりも問題だということを示すべきだと指摘する。日本におけるジェンダー平等を目指す動きの中では、現在のジェンダー秩序のもとで「男性も抑圧されている」、という主旨の主張が見られる。しかしコンネルが言うように、ジェンダーが不平等の原因であるからと、その危害を示すだけでは、人々にジェンダー平等へ向けた変化を促すことは難しいと思われる。本書を読むと、ジェンダーに関する研究をジェンダー平等に結びつけるためには、ジェンダーが人々にもたらす利益を考慮に入れつつ、ジェンダー問題を理解しなければならないと感じさせる。

本書がこうしたジェンダーの矛盾に向き合っている点も、注目に値する点である。本書の柔軟な視点は、入門者だけでなくジェンダー研究者にとっても参考になるだろう。

第3に、ジェンダーのミクロな関係とマクロな関係を通した議論の展開も、今後のジェンダー学にとって重要な提起である。本書は、ジェンダーの変化やジェンダー問題の解決を考える際に、ミクロな視点とマクロな視点をどちらも考慮に入れる必要があることを認識させてくれる。つまり、ミクロなレベルでの人々の日常行動において起きているジェンダーに関する問題は、企業、国家、そして世界というマクロなレベルと密接に関連しているという認識である。

ジェンダーに関する議論では、その焦点がアイデンティティや育児など個人の日常行動において起きている問題に当てられがちである。それ故に、問題の解決方法が、男性の意識の変化といった個人の意識の問題とされやすい傾向がある。もちろん、個人の意識が変化することは重要であるが、社会が個人の行動を規制している点を見逃してはならないだろう。例えば、育児における分業の問題である。現在の日本では、男性の育児への参加や、育児休暇を取得する割合は非常に低いが、それは個人の問題としてのみ片付けることはできない。なぜなら、そもそも企業や社会のあり方が、男性に育児休暇を取れない状況を作り出している側面があるからである。こうした状況を変化させようとするならば、企業での男性の長時間労働の問題や、

人々の心理を左右する文化（例えば、家族の扶養責任は夫にあるという社会通念）を考慮に入れる必要があるだろう。

さらにコンネルは、ジェンダー秩序には、「局所的」(local) には理解できない特質があり、地球規模のグローバルな分析が必要だともいう。その分析のために、帝国主義やグローバリゼーションにおけるジェンダー研究の視点から、地球規模のジェンダー秩序の基本的な結びつきとして二つのタイプを想定している。一つは、異なるジェンダー秩序間での相互作用、例えばイスラム国で起こった、ベールをかぶらない女性に対する西洋的女性性の影響についての論争である。もう一つは、多国籍企業や国際機関、国際メディアなどの「新しい舞台」であり、その舞台における男女の不平等を検討している。コンネルはこうした分析を通して、ジェンダーの民主化を目指す上での、二つの「闘争の舞台」を提示する。それらは、グローバルな制度と、ローカルなジェンダー秩序間の相互作用である。コンネルは、グローバルな制度における民主化の具体策（多国籍企業での雇用機会均等など）や、ローカルなジェンダー秩序間の関係で起こる問題（人種差別を受けている女性にとって男性は味方であるという、フェミニズムに対する反論など）を検討している。そして、こうした「舞台」における、民主的な社会を作る上での社会的闘争の進展に、ジェンダーに関する研究と理論が大きな役割を果たすと結論づける。

ジェンダーのミクロな関係とマクロな関係を通して、民主的な社会の問題へと繋げる議論の展開は、今後のジェンダー学の方向性を示唆するものである。

このように本書は、入門者だけでなく、ジェンダー学を専門としている研究者にとっても、日本のジェンダー問題や今後のジェンダー学の課題と方向性を考える際の大きな助けになるものである。